

平成28年7月作成版



# 軍刀操法

戸山流居合抜刀道連盟

## 軍 刀 操 法 の 沿 革

大日本帝国陸軍は、明治期の日清、日露戦争に於ける白兵戦の実戦経験から日本式の軍刀術を新たに制定する必要性を認識したことから、大日本帝国陸軍戸山学校に中山博道、国井善弥といった様々な武道家を招聘し、軍刀術の研究を進めた。そして1925年（大正14年）森永清・戸山学校剣術科長は中山博道が近代戦に適合させるべく居合から考案した5本の立ち技を採用したのが軍刀操法の始まりである。

その後、1940年（昭和15年11月）に技の追加と改定が行われ、偕行社から発行された小冊子「軍刀の操法及試斬」が陸軍の全将校に配布され、1942年（昭和17年1月）に「短期速成教育軍刀（一撃必殺）訓練要領」が作られた。そして、1944年（昭和19年3月）この二冊を合わせ若干の修正を加えた「軍刀の操法及試斬（陸軍戸山学校編）」が国防武道協会から発刊され全軍に周知された。

（昭和15年版の「軍刀操法」と昭和19年版の「軍刀操法」の相違点は文章の言い回しが若干違っているものの、操法の意義、動作及説明に変わりはない。）

本書は“旧軍の形”とも呼称される、軍刀操法について「軍刀の操法及試斬（偕行社記事 昭和十五年十一月號 附録）」を基に、更に昭和十九年国防武道協会発行の「軍刀の操法及試斬」の中の軍刀操法（其の二）を参考にして、努めて原文に忠実に作成したものである。然しながら動作及説明の部分でやや不明確な部分も有り、その解釈については、戸山学校に於ける指導者が幾人にも及んでおり、教本の解釈もそれぞれの指導者によって若干の差異が生じているものと推察される。その為、第二次世界大戦後に旧指導者等が軍刀操法を戸山流と名称変更し普及させるも、それぞれの指導者等の解釈や伝承によって違いが発生しているものと思われるが、此れらの教本の動作内容に沿っており大きな違いが無ければ可とするべきものとする。

習得の助として、1940年（昭和15年11月）偕行社から発行された小冊子「軍刀の操法及試斬」に掲載されている写真を引用した。

\*2014年(平成24年7月)に詳細な動作を理解しやすくする為に「軍刀の操法及試斬」に掲載されている写真に付記されている一部の説明文を加えた。

## 軍刀操法

### 第一本（前敵）

○ 意義

前方の敵が刀柄に手を懸け抜刀せんとするに對し、先づ其の前臂及體を下方より斬り、續いて其の敵後退するのを追込みて正面を斬る。

○ 動作及説明

- 一、 前方の敵に對し、抜刀準備をなしつゝ、左足より前進し、（第七圖 其の一）二歩目の右足を足尖を正面にして一步踏み出すと同時に抜刀し敵の右臂及體を下方より右前上方に斬り上ぐ（第七圖 其の二）。

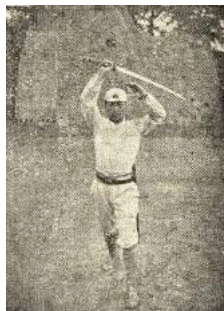


第七圖 其の一

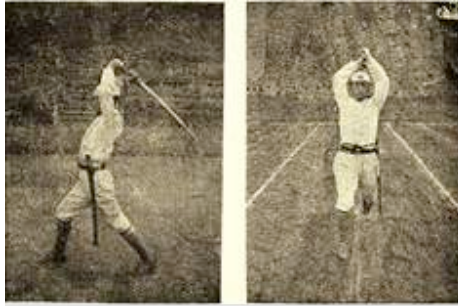


第七圖 其の二

- 二、 後退する敵を、刀を頭上に兩手にて振り被りつゝ左足より二歩追込んで其の正面を斬る（第八圖 其の一、其の二、其の三）其の一、其の二は追込みつゝ刀を振り被る要領を示す。



第八圖 其の一 「左足を出して刀尖を左より廻し頭上に振り被る」



第八圖 其の二 側面・正面



第八圖 其の三「斬り下したる刀尖の高さは略と膝高とす」

三、 右足を基準にして徐ろに構刀の姿勢を取りつゝ残心を示す（第九圖）。



第九圖 側面・正面

四、 納刀の要領にて刀を納む。

## 第二本（右敵）

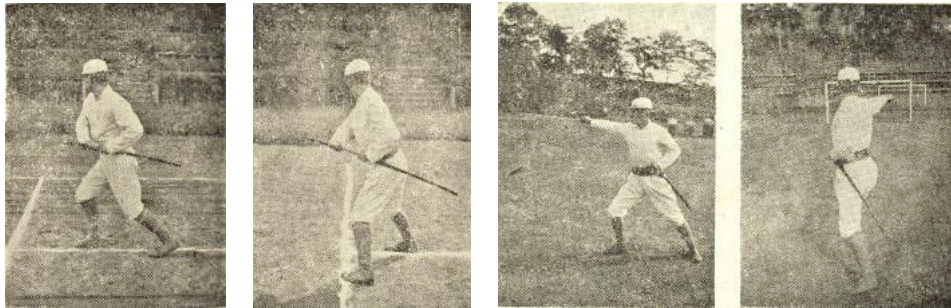
### ○ 意義

行進中右方より不意に逼り来る敵に對し、先づ横薙ぎに之を斬り、續いて其の敵後退するを追込みて正面を斬る。

### ○ 動作及説明

- 一、 左足より前進して、四歩目の右足を出すと共に右方の敵に對し、抜刀準備をなし（第十圖 其の一）、五歩目の左足を左前に、足尖を内にして一步踏み開きつゝ抜刀し（第十圖 其の二）、刀身を略と乳の高さに水平に横に薙ぐ（敵抜

刀せんとして右手を刀柄に懸けたる其の上膊部を、胸部諸共に斬りたるものと設想す)。此の際體は斬り開きつゝ左腰及左肩を固定して胸を十分に張り、同時に右足尖を内にして、右方に僅かに(約一足長)踏み出す(第十圖 其の三)。



第十圖 其の一

其の二

第十圖 其の三 側面・背面

- 二、 後退する敵を左足より二歩追込んで、其の正面を斬る(第一本 二に同じ)。
- 三、 残心を示し納刀す(第一本 三、四に同じ)。

### 第三本 (左 敵)

#### ○ 意 義

行進中左方より不意に逼り来る敵に對し、先づ其の胸部を刺突し、續いて敵が抜刀しつゝ我が方に蹣跚めき來るを、右に體轉して斜に斬る(袈裟斬)。

#### ○ 動作及説明

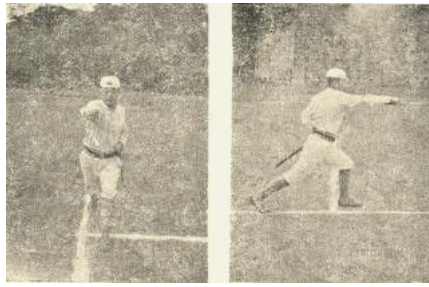
- 一、 左足より前進して、三歩目の左足を出すと共に、左方の敵に對し、抜刀準備をなし(第十一圖 其の一) 四歩目の右足を右前に、足尖を内にして一步踏み開きつゝ抜刀し(第十一圖 其の二、其の三)、直ちに敵の胸部を刺突す(敵抜刀の中途にありしを刺突せしものと設想す)、此の際體は刺突しつゝ左正面に向け、同時に左足尖を同方向に向けて僅かに(約一足長)踏み出す(第十一圖 其の四)。



第十一圖 其の一

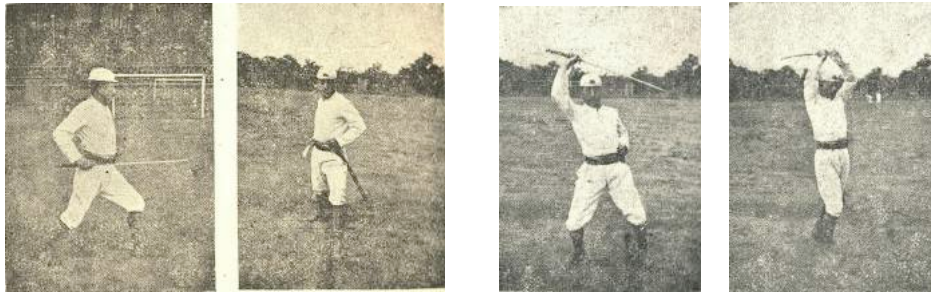
第十一圖 其の二 正面・側面

第十一圖 其の三



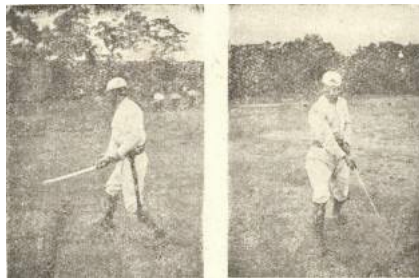
第十一圖 其の四 正面・側面

- 二、 刺突するや直ちに刀を引抜き（第十二圖）、我が方に蹣跚めき來る敵に對し右足を左足の右方に踏み開きつゝ刀を前に出して敵の斬り下す刀を左へ受け流し（第十三圖 其の一）、左斜後方に正對して、兩手にて刀を頭上に振り被り（第十三圖 其の二）、左足を右足の後方に引くと共に、此の敵を右より斜に斬る（袈裟斬第十三圖 其の三）、其の角度は三十度乃至四十度を適度とす。



第十二圖

第十三圖 其の一・其の二



第十三圖 其の三 背面・正面

- 三、 殘心を示し納刀す（第一本 三、四に同じ）。

#### 第四本（後敵）

○ 意義

行進中後方より不意に逼り來る敵に對し、先づ之を抜打斜に斬り、續いて其の敵後するを追込みて正面を斬る。

○ 動作及説明

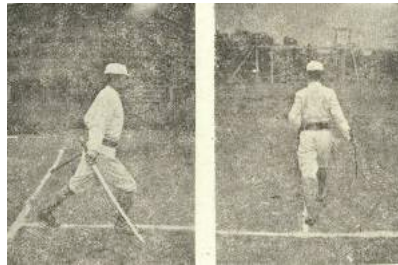
- 一、 左足より前進して、四歩目の右足を出すと共に、後方の敵に對し抜刀準備をなし（第十四圖 其の一）、五歩目の左足を右足の前に足尖を内にして一步出し、

兩足尖にて右旋回して體を後方に向けつゝ抜刀し（第十四圖 其の二）左上方より右下方に向ひ斜に大圓弧を描く如く斬り下す（敵我を斬らんとして刀を振り被れる右上膊部を、胸部諸共に斬りたるものと設想す）（第十四圖 其の三、其の四）。此の際體は斬下しつゝ後方正面に向け同時に右足尖を同方向に向けて僅に踏み出す。



第十四圖 其の一・其の二

第十四圖 其の三



第十四圖 其の四 側面・背面

二、 後退する敵を左足より二歩追込んで其の正面を斬る（第一本 二に同じ）。追込む際の刀の振り被りは右拳を外方より廻して頭上に振り被ると共に左手を側方より舉げて刀柄を握る（第十五圖）



第十五圖 其の一・其の二

三、 殘心を示し納刀す（第一本 三、四に同じ）。

## 第五本（突撃）

### ○ 意義

前方の數敵に對し突入し、逐次之を斜に斬り斃し、最後に逃走する敵を追及しつゝ其の頭部を斬る。

### ○ 動作及説明

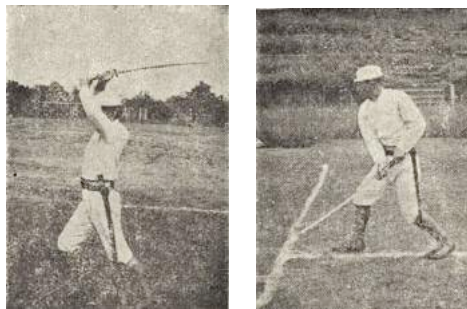
- 一、 前方に突入の餘地を存する如く、適宜後方（六歩乃至八歩を適當とす）に位置して抜刀し肩刀をなす。
- 二、 前方の敵に對し、早駈を以て發進すると同時に、刀を片手上段に振り被る（第十六圖）。



第十六圖 側面・正面

「右臂を僅かに屈指右拳を概ね頭上にし、刀を前後に向け、略と水平に保つ」

- 三、 數歩前進し、左足（五歩目若くは七歩目を適當とす）を踏み出しつゝ左手を刀柄に添へて握り、右足を出すと共に（第十七圖 其の一）正面の第一敵を右より斜に斬る（第十七圖 其の二）。



第十七圖 其の一・其の二

- 四、 拳を外方より廻して刀を左肩の上に振り被り（第十八圖 其の一、其の二）左足を右足の前に、足尖を僅に内にして一步踏み出しつゝ右前の第二敵を左より斜に斬る（第十八圖 其の三）。



第十八圖 其の一・其の二「拳を外方に廻して左肩に振り被る」



第十八圖 其の三

五、 刀を其の餘勢を利用して右肩の上に振り被り（第十九圖 其の一、其の二）右足を左足の前に足尖を僅に内にして一步踏み出すと同時に左前の第三敵を右より斜に斬る（第十九圖 其の三）。



第十九圖 其の一、其の二

第十九圖 其の三

六、 更に刀を其の餘勢を利用して頭上に振り被りつゝ體を正面に向け逃走する第四敵に對し、左足を前に出し（第二十圖 其の一）直ちに其の足にて踏み切り、基本動作面の斬撃の要領にて眞直に斬る（第二十圖 其の二）。

斬撃後は、斬撃時の伸暢せる姿勢を保ちつゝ體の餘勢に伴ひ連続數回「前へ」をなしたる後停止するものとす。



第二十圖 其の一・其の二

七、 殘心を示し納刀す（第一本 三、四に同じ）。

『注意』第二敵乃至第四敵に對する斬撃動作は連続して實施し且努めて迅速なるを要す。

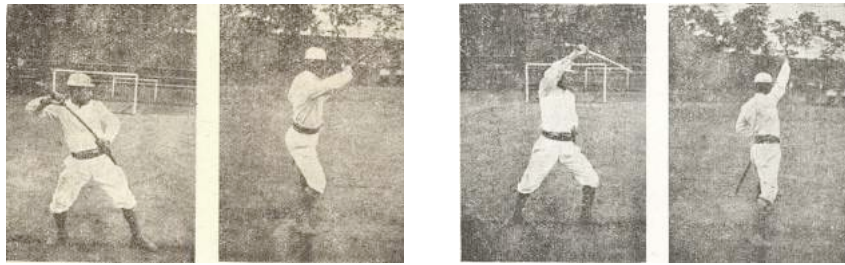
## 第六本（前後敵）

### ○ 意義

前方の敵に對し肉薄中、後方より不意に斬り掛かる敵の刀を受流して之を斜に斬り、直ちに舊前方の敵に正對し其の正面を斬る。

### ○ 動作及説明

- 一、 前方の敵に對し抜刀準備をなしつゝ左足より稍と速度を速めて前進中、後方の敵不意に斬り懸りたるに對し、右足（四歩目を可とす）を左足の前に足尖を内にして一步踏み出すと共に體を左後方に向けつゝ抜刀し（第二十一圖 其の一）刀を右片手にて頭の前上方に翳して後方より眞直に斬り下す敵の刀を左方に受け流す（第二十一圖 其の二）。



第二十一圖 其の一 側面・背面

第二十一圖 其の二 側面・背面

- 二、 敵の刀を受け流すや、直ちに右足を左足の右方に踏み開き、斜左後方に正對しつゝ刀を兩手にて頭上に振り被り（第二十二圖 其の一、其の二）該敵を右より斜に斬る（第二十二圖 其の三）。



第二十二圖 其の一 其の二



第二十二圖 其の三「左足を右足の後方へ踏み開きつつ斬り下す」

- 三、 兩足尖にて左旋回して舊前方に對しつゝ刀を頭上に振り被り（第二十三圖 其の一）、直ちに該方向の正面を斬る（第二十三圖 其の二）。



第二十三圖其の一



第二十三圖其の二 側面・正面

- 四、 右足を左足の前に出し構備の姿勢を取りつゝ残心を示し納刀す。

### 第七本（左右敵）

#### ○ 意義

左右より逼り来る敵に對し、先づ右の敵を抜打斜に斬り、續いて左の敵を両手にて斜に斬りたる後更に追込んで刺突す。

#### ○ 動作及説明

- 一、 左右の敵に對し頭を正面にしたる儘抜刀準備をなしたる後（第二十四圖 其の一）先づ右敵に對し注目し、左足を右足の右方に足尖を外にして約半歩踏み出しつゝ抜刀し（第二十四圖 其の二）更に右足を一步其の右に足尖を内に向けて踏み出すと同時に、該敵を左より斜に斬る（第二十四圖 其の三）。



第二十四圖 其の一其の二



第二十四圖 其の三 正面・側面

- 二、 刀を其の餘勢を利用して両手にて頭上に振り被りつゝ兩足尖にて左旋回し、左正面に正對し（第二十五圖 其の一、其の二）、右足を該方向に一步踏み出すと同時に、左の敵を右より斜に斬る（敵我を斬らんとして刀を上段に振り被れる其の左上膊部を胸部諸共に斬りたるものと設想す）（第二十五圖 其の三）。  
『注意』一、二の動作は連続し且努めて迅速なるを要す。



第二十五圖 其の一 其の二



第二十五圖 其の三

三、 後退する敵を、左足より二歩追込みて（一步目に刺突の構をなす）（第二十六圖 其の一） 其の胸部を刺突す（第二十六圖 其の二）。



第二十六圖 其の一 其の二

四、 僅に後退しつゝ刀を引抜き（第二十七圖 其の一） 續いて徐ろに左上段（左足を前に出す）に構へて残心を示す（第二十七圖 其の二）。



第二十七圖 其の一 第二十七圖 其の二 正面・側面

五、 右足を基準にして残心を繼續しつゝ徐ろに構備の姿勢を取る。

六、 納刀す（第一本 四に同じ）。

資料：軍刀の操法及び試斬 偕行社記事 昭和十五年十一月號付録、陸軍戸山学校長 田中久一氏の記述による軍刀操法である。

## 軍 刀 の 操 法

### 第一 目 的

軍刀を以て各種状況に應ずる斬突法を実際的に練習すると共に、特に實戦に鑑み、瞬時に敵を壓伏するの氣勢及刀勢を修練するにあり。

### 第二 實施法の概要

帯刀し、敬禮の後、準備姿勢を取り、第一本より順次實施す。

各動作終了毎に納刀し、準備姿勢に復したる後、次の動作を開始す。全動作終了せば準備姿勢を解き敬禮す。

### 第三 實施上特に注意すべき事項

- 一 心を静め、特に下腹部に力を充實して實施す。
- 二 各動作は其の意義を十分理解して、之が緩急節度を状況に適合せしむる如く實施す。
- 三 刀の操法に於いては、特に刀刃の方向と、臂力の用法とを正しくし、努めて斬突量を大ならしむる如く著意するを要す、之が爲迅速よりも先ず確實なる刀の操法の修得を大一義と心得ふべきものとす。
- 四 斬突に際しては通常 エイ 若くは ヤア 等の發聲を伴はしむるものとす。
- 五 危害豫防竝に軍刀の愛護上、四周上下に對しては深甚の注意を拂ひ、人畜を傷け或は刀尖を毀損するが如きなきことを要す。

### 第四 敬 禮

開始及終止共に通常帯刀（刀差に帶ぶ）の儘不動の姿勢にて敬禮す（陸軍禮式令室内外の敬禮）。

抜刀、納刀動作を省略して行ふ際は肩刀にて敬禮す。

「注意」刀緒は抜刀、納刀動作を省略して行ふ場合之を使用し、然らざる場合は通常之を刀より離脱するか若くは短く結びをくを可とす。

### 第五 準備姿勢

- 一 準備姿勢とは不動の姿勢に於て左手を以て刀を抜刀準備の姿勢に保ちたる姿勢を謂ふ。

其の要領は不動の姿勢より、左手を以て鐔に接して鞘を、右手を以て鐔に近く刀柄を



共に捷路を経て上方より握り、右手の食指にて發條を押し（異式のものには之に準ず）  
両手を以て鯉口を切り、此の間に左手食指を握り込みて刀身の閉鎖を防ぎ、且つ左手  
拇指を以て鐔を内側（右側）より、刀の抜けざる如く押へたる後、右手を刀より離し  
て不動の姿勢に復し、左手にて刀を正しく前後に向け確實に保持す。

- 二 本姿勢は敬禮の後、直ちに之を取り、爾後各本動作終了毎に、納刀に引續き、左手を  
以て刀を準備姿勢に保ち、右手を離すと同時に、左足を右足に引き著けて準備姿勢に  
復す。

全動作終了せば両手を以て刀の準備姿勢を解き不動の姿勢に復す。

- 三 抜刀、納刀動作を省略して行ふ際は、特に示すものゝ外肩刀の姿勢より右臂を下方に  
自然に伸し刀尖を下げて刀を保持せる姿勢を取りたる後動作を開始し、爾後各動作終  
了毎に左足を右足に引き著くると同時に右姿勢に復歸し、全動作終了せば肩刀の姿勢  
に復するものとす。

## 第六 抜刀及納刀

- 一 抜刀の要領は、準備姿勢より左手を以て柄頭を僅に内にし（體の略と中央前）つゝ、  
刀刃の方向を外方に向くと共に、右手を以て刀柄を下方より鐔より僅かに離して握  
り（以上抜刀準備と謂ふ）刃部を鞘に擦らざる如く方向を正しく抜く。
- 二 納刀の要領は左手を以て其の拇指と食指との間に鯉口を握り込む如く、鞘を上方よ  
り握り、之を僅かに（約四十五度）外方に傾けて保持したる後、刀を持ちたる右臂を  
自然に曲げて、刀背を左手拇指と食指との握合部及同附根部に當て之に沿ふて刀背を  
込らし、刀尖が鯉口に至る如く、右手を前方に出すと共に、腰を左に捻りて動作を容  
易ならしめ以て刃部を鞘に擦らざる如く徐ろに納む。
- 三 抜刀、納刀動作を省略して行ふ際の抜刀準備は刀背を左前膊外側に、恰も帶刀の際抜  
刀するが如き姿勢に當て、刀を動揺せざる如く保持するものとす。
- 四 納刀は一通り要領を會得し、暗夜と雖も故障なく行ひ得れば足れり。蓋し實敵を斬突  
せば、必ず刀を拭ひたる後に非ざれば納刀することなきより考へれば、納刀は力を入  
れて調練するが如きは愚の骨頂にして、平時武道の弊といふべきなり。